

烏森トレッキング回想記

第十六回

日 程：'06. 5. 27 (土) ~ 5. 28 (日)

行 程：1日目 武蔵五日市駅～上養沢～御岳林道～七代の滝～ロック・ガーデン～御岳沢休憩所～綾広の滝～長尾平～ 泊／旅館「憩山荘」
2日目 宿～大塚山～御岳平～滝本～払沢～玉堂美術館～御岳駅～鳩ノ巣駅～鳩ノ巣バンガロー（昼食）～鳩ノ巣駅

メンバー：米本、山田、小林、森、磯崎

新緑トレッキングは、前回に続き、奥多摩の山。

向かい先は約2年振りの御岳山で、**何と、今回はケーブル・カーに乗らず、山麓から登ろうと云う大胆な行程を計画し、その上、宿泊先は日観連加盟の「憩山荘」。**

むべなるか、週初めの天気予報は雲と傘マークで埋め尽くされ、前日には、身支度に迷うことのない確実な降雨予報。

集合場所は、前回同様、武蔵五日市駅。

霧雨模様の駅頭には、さすがに人が少なく、今日に限っては、通勤、通学者が疎らに行き交うターミナル。

5,000円のバスカードと寝酒を購入した後、バス駐車場裏手に位置する、「小倉公園」に上り、お湯を沸かして、本日、2杯目のコーヒーを啜む。

小さな公園ながら、周りを樹々が囲い、雨に洗われた黄緑色の若葉が、何とも清々しい。

雨足が強まるのを機に、駅に戻り、メンバーを出迎え。

会頭は体調調整中で、吉川氏は外せぬ仕事、大谷氏は例会の由にて、それぞれ欠席。**“計画書に驚き、参加を見送ったのでは？”、と心ない陰口をする輩居るも、厳しく諫言。**

電車が到着する度に、山田、米本、小林&森氏の順でメンバーの笑顔が加わり、無事、全員集結。

意気揚々と、「上養沢」行きのバスに乗り込み、乗客5名で出発する。

「上養沢」は武蔵五日市駅の北西方向に位置し、「大岳山」に連なる「馬頭刈尾根」と「日の出山」に連なる「金比羅尾根」が収束する、家並み数軒の谷間集落。

峡間の県道201号線を、「養沢川」沿いに上る。

途中、「大岳鍾乳洞」や、「養沢荘（公共保養施設）」、「養沢神社」、を通過するが、乗降客に動きはなし。

【余談46】当路線は、第二回トレッキングでも帰路に利用している。

「日の出山」から下山後、武蔵五日市駅へ出たもので、季節は同時期、その折りは雨上り後であったが、今回同様、雨に輝く新緑が印象に残っている。

今回のメンバーでは、米本、山田両氏が参加しているが、当初、記憶になし。

終着バス停、「上養沢」の小さな広場で、ザックを開いて、最後の身支度。

合羽を被ったり、傘を拵げたりと、カラフルな雨具が咲き乱れる中、山田氏の新調ザックに気付き、眼を瞠る。

“あの色調、あの格子縞は、…”

紛ごうことなく、次回購入候補の一つに考えていた「ニッピン製」で、山田氏は、今回から火器も持参し、装備の整備に意欲満々。

【余談47】「ニッピン」の正式商号は「日本用品(株)」で、秋葉原に本店店舗を置く他、神田小川町にも2店舗を擁し、それなりの規模と知名度を有す山岳用品の専門店。

長い付き合いで、山歩き再開時から、山靴等の・装備は当社製品を愛用させてもらっているが、その間、秋葉原2号店の閉館、本店販売フロアの縮小等、スポーツ用品業界の、経営面での厳しさは当社でも例外にないのであろうか。

ザックは、長い間、当社オリジナル・ブランド品、「テクノライト」シリーズを愛用させてもらっている。背当て部分にネットを組み込み、フィット感、通風効果を高める工夫を施しているのが特徴であるが、選択の決め手は両サイドに取り付けられたサブポケットで、かつて学生時代に使用した大型ザック、「キスリング」に対するノスタルジアそのものである。

不思議なもので、若干の仕様違いや色違いはあるものの、山歩きの途中、同じワンポイント・マーク、「山と太陽」を見掛けると、つい親近感を誘発されるものである。

しかし、酷使も10年近くなると、布地の傷みばかりか、縫製部至る所で綻びを見せ始め、“そろそろ”と思い始めていた頃、とんでもないアクシデントが発生！

‘05年秋、「高川山」頂上間近の登山道片隅で休憩中、立て掛けていたザックが倒れた弾みで登山道から山斜面にダイビング（まさに、ぴったりの表現！）。

青い塊（12kg内外）は、山斜面、疎林の間をびっくりする様なスピードで飛空し、たちまち、遙か彼方に消失、杉の木立に衝突しないのが摩訶不思議！

残像のみが頼りで、止むなく、ジグザグの登山道を横断するように、山斜面を直降下し、後を追う。

状況は、何とも絶望的。

途中からは登山道を下り、ザックの中身を思い浮かべながら、放棄時の具合勘定を始め
てしまう。

あれれっ、道の先に、眼の上に手を翳しながら、下方の谷間を覗き込み、何かを指差す
人が！

さっき、上で擦れ違ったばかりの中年夫婦で、それきたとばかりに、その方向に視線を
移すや、木立に囲まれた大岩の下に、青色の何かが…。

勇躍、枯れ木を伝って藪斜面を掛け降りるや、傷付き汚れた我がザックに相異なし、つ
いに捕縛。

さすが登山ザック！

ストックのホルダーベルト支持布が、1 cm角程度鍵形に引き裂かれているものの、それ
以外に大きな支障は見られず。

とは云うものの、カルビナで取り付けていたカメラはケースのみで中身は行方不明、ま
たザック内収納のプラスチックボックスも輝割れ、衝撃の強さを窺わせる。

カメラ本体を探しながら、再び、急な山斜面坂を登り返すと、奇跡かな、枯れた杉葉上
に我がカメラ！

しかし、残念無念、レンズ部、筐体が破損し、フィルム抽出がやっつとで、見事にお釈迦
と化す。

再度、登山道を登り、“良かった、良かった”と安堵する一方、“山頂間近であったのに
…”と愚痴っている・、人身事故に至らなかった幸甚に気付き、思わず冷や汗をかく。

こうした事情から、次のザックを探しに、その後何回か、「ニッピン」に立ち寄っていた
が、現在の物より、若干、容量の大きい物をの条件から、「格子縞」も眼に止まっていた一
つであった。

余談が長くなってしまったが、序でに云うと、「ニッピン」では、すでに、あの格子縞ザ
ックを店頭置いておらず、現在は、前の物より一回り容量の大きい(35cc)、同じテ
クノライトを背負っている。

準備は万端、バス停を後に、舗装路の続きを、北に歩き始める。

道沿い周辺には、なお数軒の民家が散見されるも、人の気配はなく、無遠慮に、垣根越
しに邸内を覗き、外部と峻別するかのように入入れされた庭に苦笑する。

降り止まぬ雨に、進むに連れ、つい寡黙となり、周囲を包み、雨に洗われて光輝く若葉に見入り、右手を流れる養沢川の瀬音に聞き入る。

道の先、林道への曲がり角に立派な公衆便所が建ち、その右横に、「日の出山」への登山道木標を認めると、やっと両名の記憶も蘇り、昔話に会話の穂先を得る。

途中、一度の休憩を挟み、更に1時間強、なだらかな上りの林道を歩き、終着点に到達。

ここから、沢沿いの急坂登山道に入り、間無く、長尾平／売店前からの直降下ルートと合流、第二回目にこのコースを辿ったが、両名の記憶は如何也？

ロック・ガーデン下流部となる岩場道を進むと、途中、教師に引率された小学生数名が、小さな沢を囲み、何かを観察中。挨拶を交わすのみで、小さな木橋の道を開けてもらい、先を急ぐ。

濡れて滑りやすくなった大岩を、谷側から慎重に巻くと、「七代の滝」。

生憎の天候により、人影は見られずも、本日も水量豊かに怒濤の流れ、白い激流が滑るように七段の釜を打つ。

足場の滑り易さを警戒してか、メンバーは鉄階段下に座り込み、滝淵に近寄ろうともせず。

当初予定の、滝流を眺めながらの昼食は、雨により、早々と変更済みにて、止むなく、重いザックをまた担ぎ、今回の最大難路となる急な鉄階段の連続をゼイゼイ登って、蛇がとぐろを巻いた様な木の根を踏み分け、何とか天狗岩下に這い登る。

しばし、休憩。

余りの、呼吸の乱れに、かって、ロープを伝って天狗岩上に登ったとか、岩下の石段に並んで撮った写真は傑作であったとか云い募り、何とか氣息を整える。

「鳥」のロック・ガーデン歩きは久し振り。

人気がなく、静寂に包まれたガーデンを、右に左にと足場を移動しながら、ゆっくりと辿る。頭上、周囲は、雨に濡れ、黄緑色鮮やかな若葉に満ち溢れる。

屋根付きの「御岳沢休憩所」に入り昼食。

今回は、弁当持参であるが、3台の火器が並べられ、余裕綽々、味噌汁用に、カップ麺用にと湯を沸かす。

漬物等、各自自慢の食料が提供される中、最近常食の、「胡瓜」＋「もろみ」を披露すると、あっさり味がまずまず好評。

しばらくして、中年女性2人組みが到着。拡げた荷物を寄せ集め、早速、席を譲る好々爺。

雨の降り止まぬ中、ガーデン歩きを再開。

濡れた岩場道を慎重に辿り、「綾広の滝」でロック・ガーデン歩きを無事終了。

水場から長尾平へと回り、本日雨休業の売店軒下で雨宿り。いつもなら、人盛況な長尾平に人影はなし。

今回のテーマ、御岳山（御獄神社）に登る（参拝）タイミングを窺うも、メンバーは忘れた振りして知らぬ顔。

終には、“早く宿に入ろうや”の合唱が始まり、止むなく、神社の脇道を歩き、本日の旅荘へと向かう。

眼にももの見せてやる！

驚くなかれ、本日の旅荘、「憩山荘」は“日観連”の加盟店。しかも、事前の料金打ち合わせはなく、ただ、“登奈利さんでは、いかほどのご利用額で…”、の問い合わせに答えたのみ。

“母ちゃんから、しっかり、小遣い貰って来たか？”とばかりに、メンバーの顔を一瞥する。

【余談48】今回、久し振りに、「登奈利荘」に予約電話を入れたが、女将から、“満室ですので悪しからず”、とすげなく断られ、“宜しければ、別の宿をご紹介させてもらいましょうか”、と反撃を受け、案内されたのが当荘である。何でも女将の縁戚筋に当たると云う。

そこで、女将に一言申す。

女将、いくら何でも、あれは無いですよ。エッ、何のことだって？ とぼけちゃ困りますよ、私は、TV東京も見ていますよ。

あれは、奥多摩を訪ねる旅番組で、「ザ・ガードマン」で一躍有名になった俳優倉石功夫妻が案内人でした。

奥多摩／川苔谷の名瀑、「百尋の滝」を登った後、当日の宿は、御岳山々上、御師の宿、「能保利」と紹介されました。

「能保利」さんは茅葺き屋根が印象的な旅荘で、場所は確か、お宅の少し先、神社への急な坂道が始まる左手でしたねえ。

例によって、御岳産の、旬の野菜が並べられ、夫妻が、“旨い、旨い”と云いながら、“都心から約2時間で、こんなに自然が満喫できるとは”、と常套句を発止しながら、感嘆するのは致し方ないにしても、隣の席で食宴する女連れの泊まり客にマイクが向けられた時、“料理も美味しいですし、いいですねえ”、と答えるのが浴衣に羽織掛けの女将とは…、どう云う仕掛けだったのでしょ。

長くなった序でに、苦情を続けますが、案内画像そのものにも多々疑念が有りました。

視聴者は気付きっこないと高を括っているのか、繋ぎ合わせの映像内容は、奥多摩駅周辺から急に御岳ロック・ガーデンに飛んだり、また奥多摩駅に戻ると云う、時系列矛盾を平気でやり、また、ハイカーで行き交うロック・ガーデン入口木橋に若い女性を座らせ、食事をさせる等、一時、通行止めにでもしたのでしょうか、何度も木橋を渡ったことのあるメンバーなら直ぐに解る“やらせ”を堂々とやる等、ああ、この退廃振り！

「憩山荘」は、御師集落高台に位置する一軒家。

広い敷地に庭を配し、建物間口も、「登奈利荘」、「南山荘」の規模を凌駕する。

若干、早目ではあるが、若女将の出迎えを受け、無事入場。

ずぶ濡れ模様の出で立ちに、手慣れた手順か、早速、玄関上がり場横、ストーブが燃やされる板場に案内され、立てハンガーに、帽子、合羽、タオルと濡れた衣類を掛ける様、勧められる。

部屋は二部屋に分かれ、例によって、年長組みと年少組みの自然な分かれ。

硝子戸を引くと、降り続く雨に、遠くの視界は閉ざされるが、周囲を囲む樹々には、雨滴に光輝く青葉が溢れ、寒気も忘れ、しばし見入る。

長い夕前、暖かい部屋で、各自、お茶を飲んだり、TVを観たり、はたまた、昔話に花を咲かせながら、のんびり過ごす。

宴は1階大広間。

例によって、自栽培した春の野菜を、蒟蒻、天ぷら、サラダ、煮物で楽しみ、岩魚で舌鼓み。いつものように、立ち上がって料理膳を写真でパチリ。

この時、「登奈利荘」の、女将との縁戚関係を訊いた筈も、記憶に無し。

二次会はウイスキー片手に、“プロ野球の監督論”を奔放に論ずるが、何故か昔を思い起こすようで、皆なの意見にもかつてのようなチームへの執着は感じられず、ただ淡々と自説を披瀝。

適当な時間に話を切り上げ、寢床に向かう。

翌朝も雨。

硝子戸越に見る窓外、樹々の青さは、ますます輝きを増し、至る所で雨滴を光らす。

早起きした米本氏は、早朝一人、皆なを代表して、御獄神社（御岳山）に参拝（登山）してきたと云い、山田氏は、例によって、朝風呂を楽しんでいる様子。

朝食を摂りながら、下山コースの思案。

TVの天気予報は、雨は午前中に止むと予想し、心なしか、時間と共に雨脚も弱まる風に見え、裏参道下山は、何の因果か、これまで2度変更、見送られており、何とか実行したいと思う一方、岩場道の滑りが懸念され、また、小枝の残滴にあえて濡れることもないかと思案が迷走。

最終的には、またまた断念、「大塚山」に立ち寄った後、ケーブルで下山し、御岳駅前の「玉堂美術館」を覗き、最後だけは予定通り、「鳩ノ巣バンガロー」でバーベキューとメンバーに説明し、“**そうせい公**”の同意を得る。

1階板場で、すっかり乾いた雨衣を再装備し、いよいよ出発。

おととつ！ 笑顔の若女将から勘定書きを受け取り、震えを隠して内訳見るや、何とお見事、「登奈利荘」の料金にびたり同額、縁戚関係ここに見たり！

挨拶に立ち寄ることもなく、「登奈利荘」前を通り過ぎ、御岳ビジターセンター脇から富士峰園地巻道を歩き、いつも休む、例の木テーブル先を左に折れ、「大塚山」への登山道に入る。

「大塚山」山頂に着く頃には、雨はすっかり止み、朝靄が消失、辺りは、いつの間にか明るさを増し、心なしか青葉が別色の輝きを見せる。

ただ、蒸し暑さも格段で、獲物を見つけたかの様な虫の群が一勢にまとわり付き、メンバーは閉口、準備した「キンカン」で、メンバーをスプレーし捲る。

しばらく山頂に佇んだ後、御岳平へ下る。

ケーブル、バスと乗り継ぎ、御岳駅ひとつ手前のバス停、「払沢」で下車し、案内看板を辿りながら、「玉堂美術館」に入場。

川合玉堂は、日本人の“心のふるさと”と云われる「山村」、「農村」風景を描くことにより、日本人の心象原風景を表現する日本画家として知られ、自身長く奥多摩に居住し、「むかしみち」の途中、「数馬峡橋」のたもと等々、奥多摩の至る所に同氏の踏み後が記されている。

静寂に包まれた建物外観とは一変し、館内は人が盛況。

特に年配女性の姿が目立ち、抑制された会話の中にも、熱心な鑑賞振りが伝わる。

下書絵も多く展示され、予想以上の緻密さに、絵画の原則に変わりなしと感嘆する一方、創作過程が見え透いてしまうのではと下司の勘繰りもする。

入口部に設置された玉堂紹介ビデオを見ながら、メンバーの帰りを待ち、時刻表と睨めっこ。

御岳駅への遊歩道を歩き、奥多摩行下り電車に乗り、鳩ノ巣へ。

「鳩ノ巣バンガロー」は、多摩川／鳩ノ巣溪谷沿いに位置するキャンプ場で、第一回トレッキングの最終立寄地。

その折りは、予約無しを理由に、冷たく撃退されたが、今回は予約済み。

女将の、“内のビールは高いから、途中の店で買ってきた方がいいよ！”との指示通り、缶ビールを抱えて急な石坂を下り、管理事務所でバーベキューの食材を受領。

亭主、女将共、負けず劣らずの太っ腹と見たが、若干、女将が強腕か！

一番奥の、溪谷沿いの屋根付き竈場を占有し、場所の設営、火熾しに取り掛かる。

シェフは野外料理に長けた森氏と自然に決まり、同氏の指導の下、野菜をカットし、オーソドックスなバーベキュー料理の調理を開始。

木ベンチのシーソーでビールをこぼしたりの小騒動あるも、“旨い、旨い”と箸をつつき合い、仕上げの焼そばに溢れるばかりの油が注がれた時に、思わずクレームを入れるも、“旨いから”とシェフは涼しい顔。

鳩ノ巣溪谷は御岳付近に比し、遙かに谷が深く、雨に水量を増した多摩川上空には、空を切る様に、「雲仙橋」が峡谷間を繋ぎ、左手に渡り進むと裏参道。

ポリタン、予備水筒を満タンにしたり、生け簀の岩魚を見ながらし、しばし時を遣り、最後の清算を帰路出発の合図とする。

急坂を登り返して鳩ノ巣駅へ。

ホーム上で、森氏が各自の最短帰宅コースを携帯で検索。好々爺、幾人耳を傾けたやら。